

韓国の高等教育の平等理念と問題点

織田 愛理

はじめに

韓国では日本のセンター試験にあたる大学修学能力試験が国を挙げた一大イベントとして行われている。そのため毎年試験当日には、パトカーが試験に間に合わない受験生を試験会場に送り、空港では英語のリスニング試験中の飛行機離着陸を制限するなど、国が全力でサポートを行っている。この大学修学能力試験は今年もすでに実施されたが、例年の1.5倍の試験室が用意され、コロナ感染者や自宅隔離対象者にも受験の機会が与えられたという（朝日新聞 2020）。政府がここまで手厚くサポートするのは、韓国の高校生がこの日に人生を賭けているからだという。それは、韓国の大学入試は随時試験などを除くと、大学独自の試験がないため、大学入学を目指す者は全てこの試験を受けなければならないことが理由であると考えられる。そのため受験戦争と言われるほど、多くの人がこの試験に力を入れざるをえないのである。この大学修学能力試験は、国民に教育を受ける機会を平等に与えるため政府が行った政策であり、実際にその試験を受け良い結果さえ出せば、教育格差などは関係なく誰もが良い大学に入学できるため、その成果は出たと言えるだろう。しかしこの試験の影響で、主に高校生における塾などの過度な私教育が問題となっている。金（2019）によると、政府が大学修学能力試験のレベルが上がることによる学生の負担軽減のために、試験科目を減らし思考力を試す問題に変えるなど対策を行ったが、逆に私教育を煽る結果となったという。より良い塾に通わせるには経済的余裕も必要となり、経済格差が教育に大きな影響を与えていると考えられる。

教育を受ける機会の平等は一見守られているように見えるが、試験を受ける過程に経済的格差などによる問題が見え隠れしている。このような状態で高等教育が平等に受けられると言えるのだろうか。そこで本論では、政府が考える高等教育の平等理念やその問題点、国民が実際にどの程度高等教育に平等を感じられているのかについて、さらに私教育等の問題によって引き起こされているさらなる問題について考察する。

第一章では、高等教育に関係する初等教育・中等教育の教育制度が現在の形になるに至った過程を概説する。第二章では、高等教育の平等に関する問題点をまとめる。第三章では、実際に韓国人にインタビュー調査を行い、第二章の問題から引き起こされる新たな問題について明らかにしていく。

第一章 初等・中等教育における教育機会の平等

1. 小・中学校の義務教育化

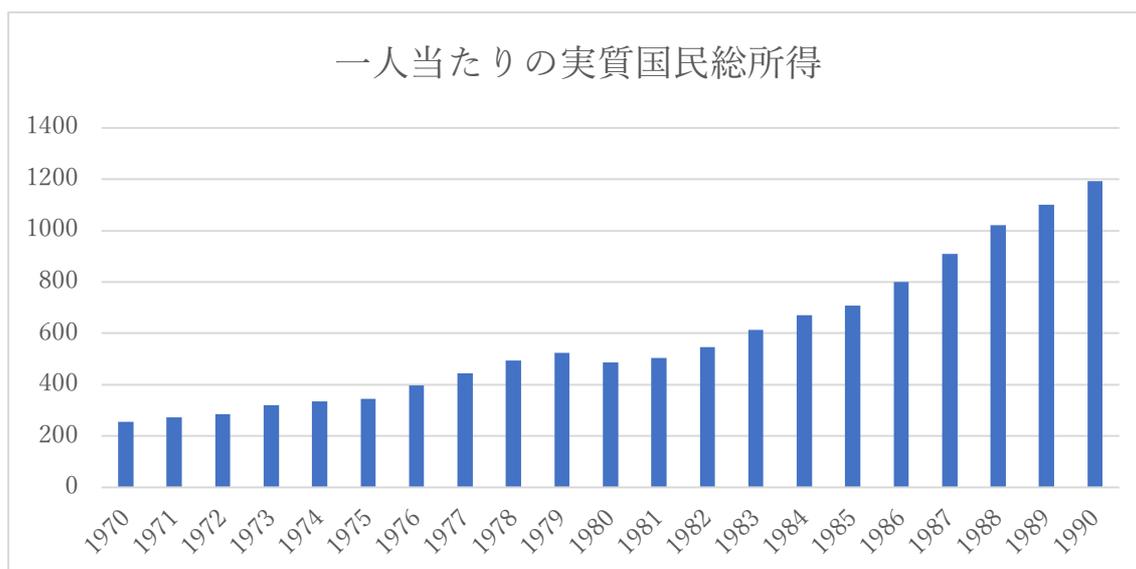
韓国の教育制度は、日本同様 6-3-3-4 制の教育課程であり、中学までが義務教育である。石川（2016）によると、これは戦前の日本による植民統治下に、日本の近代学校教育制度が導入されたことや、日本同様戦後にアメリカの影響を受けたためである。

現在韓国の義務教育制度は、日本同様初等教育及び中等教育前半までが義務教育だが、完全な義務教育化に至ったのは比較的最近のことである。韓国の初等教育機関である初等学校は、1948年に制定された制憲憲法により義務教育化され、1949年の教育法により国民全体が6年間の初等教育を受ける権利が確立した。しかし、有田（2016）によると、当時の韓国政府の財源は貧弱であり、学校の設備費用の多くが在校児童の父母がしていたという。このことから義務教育化は確立したもの、完全無償化が達成されたわけではなかったことがわかる。

中等教育前半機関である中学校も 1984年に義務教育化されたものの、離島や僻地居住者及び特殊教育対象者のみに無償義務教育が実施されていた。義務教育の完全無償化に時間がかかった要因は、初等教育同様政府の財政力が貧弱だったためだ。そして 2002年に中学1年生のみが無償化になり、実際に完全無償化となったのは 2004年以降である。しかし、教育段階別就学率によると、完全無償化がされていない 1985年には中学進学率が 100%に達しており、このような急速な教育拡大は、所得増大により保護者の進学費用能力が上がったことが要因だとされている有田（2016）。また、図 1を見ると、1977年頃から急激に所得が急増しており、ここからも所得の増大が教育拡大に影響を与えていると推測される。

図 1 韓国の一人当たりの国民総所得

(単位：万ウォン)



一人当たりの国民総所得（韓国国家指標ポータルサイト，2020）を基に筆者作成

2. 中等教育の教育機会平等化政策

政府が教育機会の平等確保のために行った大きい政策が「中学校無試験入学制度」と「高校平準化制度」である。

1960年代頃までの中学校は、義務教育化がされておらず進学する学校を自由に選ぶことができ、一部の学校のみが入学試験を実施していたが、小学校が義務教育化され進学率が上がったこともあり、中学校も進学率が徐々に増えていった。しかし先ほども述べたように、政府の財力が貧弱なこともあり、有田（2016）によると、新設校と伝統校の間に学校施設や教師の質などの教育条件、あるいは高校への進学実績において大きな格差が存在していた。この格差により受験生はより良い学校への入学を希望するようになり、中学受験において徐々に受験戦争と呼ばれるような激しい受験競争が起こるようになった。このような中学の受験競争問題により、政府は1968年に中学受験競争の解消を目的とし、中学校無試験入学制度を発表した。これは、中学進学時の試験をなくし、抽選による入学を行う政策であり、これにより中学進学時の受験競争は完全に解消された。

中学校無試験入学制度により中学進学時の受験競争は解消された。その後、高校でも無試験入学できるなど、学校独自の新入生選抜制度を実施するようになった。この影響から趙、卿我（2013）によると、無試験入学に該当しない生徒や保護者から、教育を受ける機会に対する制限であるという批判高まり、一時期高校入試が教育の非正常化とも言われるようになった。ここから中学同様高校受験競争が起こった。この受験競争の解消を目的とし、政府は1974年に高校平準化制度を発表した。これは中学校無試験進学制度と同様の制度であり、この高校平準化制度により高校教育の拡大や高校進学時の受験競争も解消されていった。ここから、小・中学校及び高校での教育機会において平等化が達成されたと言えるだろう。しかし、中学校無試験入学制度や高校平準化制度による大学入試の競争や、高校の学力低下が問題視されることとなった。有田（2016）も、中等教育の入試制度と学校形態を「教育機会の形式的平等化」と表記している。その後高校の学力低下の解決策として、政府は新たに特殊目的高校を設立した。特殊目的高校とは、一般高校とは異なり、例外的に競争入試を許されている専門的な教育を中心とし、特殊な才能を開花させるための高校であり、才能の優れた一部生徒の学力水準を維持・向上させるための措置としてできた学校である。松本（2016）によると、科学や外国語など、特定の分野を対象としつつも、有名大学への進学実績のために「進学校」として社会的に認知されるに至ったという。これにより、先程問題としてあげた高校の学力低下が、ある程度抑えられた。さらに、政府は2000年に英才教育振興法に交付し、英才学校を設立した。英才学校に指定された学校は、韓国の高校入試で唯一「英才性検査」と呼ばれる筆記試験を行い、カリキュラムに特例が認められ、学校の裁量で編成できる。また一般高校では内申点を相対評価でつける必要があるが、絶対評価が可能となる。そのため岩淵（2013）によると、韓国最高の難関高校であり受験生の親たちの憧れとなっている。

3. 高等教育における教育機会の平等

韓国の高等教育は、中等教育以上に急速な成長を遂げた。日本の植民地時代には高等教育の制限があったが、解放後、多くの大学が新設された。しかし先程述べたように、この時期の初等教育はまだ義務教育化が成されておらず、高等教育を受ける者も少なく、需要を超えた供給となっていた。有田（2016）は、この急速な高等教育拡大が様々な問題を生み、特に高等教育の質的向上が量的な拡大に追い付かなかったことを重要な問題として挙げている。私立大学が大幅に増えていったが、その過程の設備や教員の教育条件が合わず、卒業後の就職率なども悪かった。しかし、政府はこの時点では政策を施さなかった。その理由を小川（2018）は、私立大学創設者に対する社会の信頼が高く、私立大学財政のほぼ全てが学生の授業料によって成り立っていたため、国が関与することは不適切であるという観念があったからだとしている。中等教育の義務教育化も国家の財政力の弱さゆえに時間がかかったことから見ても、これは当然のことだと言えるだろう。この高等教育の量的拡大を抑えるため、政府は1955年に「大学設置基準令」を出し、大学設置の規制を行ったが、すぐに緩和してしまっただけで再び量的拡大が進んでしまった。その後1965年に「大学学生定員令」を出したことで、私立大学を含むすべての大学の定員人数を大統領が決めることとなり、ようやく量的拡大を抑えることができた。そして、1969年に「大学入学予備考査」の受験を義務付けたことで、公立、私立全てを含む大学進学希望者は同一試験を受けることとなり、のちに現在もおこなわれている大学修学能力試験へと変化していった。

4. 国を挙げて行われる大学修学能力試験

韓国の入試制度は大きく分けて二つあり、定時試験と随時試験がある。定時試験は1994年から全国共通で行われる試験であり、大学修学能力試験を受け、その結果及び面接、論述などにより合否を決定する試験である。この試験は日本のセンター試験に似ているが、国を挙げて行われる非常に大きなイベントとなっている。随時試験は大学修学能力試験の前に実施され、面接や書類による合否決定が一般的であり、大学修学能力試験が利用されるのは、最終的に決められた基準を満たしているかの判断に使われる程度である。先ほども述べたように、この大学修学能力試験の実施は、高等教育を受ける機会の平等であるが、需要以上の大学の量的拡大防止策としてできた試験制度である。しかしそれだけではなく、この全国共通の試験により、試験の結果がよければ良いほど良い大学に行けるなど成績ベースの選抜が実施され、初・中等教育とは異なる入試制度の導入がなされた。また、1999年から高等教育の平等と不正の防止のため、「三不政策」と呼ばれる三つの政策が行われている。一つ目は、先ほど述べた全国共通の大学修学能力試験以外の各学校による学科試験の禁止であり、全国共通の試験である大学修学能力試験による教育機会の平等が守られている。二つ目は、出身高校の等級化による学生の選抜の禁止であり、高校の質による学生の区別を禁止するものだ。これにより、富裕層の多い地域の高校などの優遇を防ぐようにしている。三つ目は、入学の見返りとしての寄付金等の徴収の禁止であり、富裕層の寄付金などによる入学

を防いでいる。これにより富裕層と貧困層間の入学時の平等を保っている。金（2016）も、学生が教育にアクセスする際の公正性を確保しようとする政府の努力の一環であると述べている。

第二章 高等教育に影響する問題点

1. ソウル近郊大学と地方大学の教育格差

安東（2013）によると、韓国人はソウル志向が強く、地域格差が大きい地方の大学は苦しい状況にあるという。主に地方の国立大学のランクが落ちており、金（2016）によると、この地方大学のランク落ちは就職率の低さに結びついており、大手企業がソウルに拠点を置いていることやソウル周辺大学の方がレベルが高いという先入観などが影響しているという。ソウルが良いという先入観は、韓国の市の中でソウルのみが正式名称にソウル特別市と「特別」という言葉がつくことからわかる。韓国人がソウルを特別に思い、ソウルのものは良いという先入観を持つてしまうのは仕方がないことなのかもしれない。しかしそのような先入観によるソウル近郊大学と地方大学の格差は、非常に大きな問題である。有田（2006）によると、1979年に専門学校が専門大学へ変更されるのに伴い、専門大学にも大学就学能力試験の先駆けとなった大学入学予備考査が義務付けられ、それにより比較的低い成績で入学できる専門大学が格下に位置づけられたという。これにより大学の序列付けが行われ始めた。さらに先ほど述べた1965年に出された「大学学生定員令」により、大学の定員人数を決めるようになったことから、ソウル近郊大学への入学が難しくなり、これも現在のソウル近郊大学に人気が集まる要因となった。また、韓国の人口減少も大学間の格差に影響を与えており、小川（2018）によると、人口減少により地方大学入学者が減り、さらに地方大学生がソウル近郊大学に編入するケースも多く、格差が広がり地方大学の経営までもが厳しくなっているという。さらに、人口が減少するなか入学資源を確保するための大学間の競争が激化しており、その序列で優位に立つためにより優秀な学生を集めることが不可欠となっているという。このようなことから、韓国人のソウル志向の強さが大学格差に大きな影響を与え、人口減少がそれにさらなる拍車をかけていると言えるだろう。表1を見ると、韓国にある大学の約2割がソウルに集中していることがわかる。またこの表には記載していない地方私立大学は、多くても10校未満であり、約4倍以上の私立大学がソウルにあることになる。このように、単純に大学数からだけ見てもソウルに集中していることがはっきりとわかる。さらに表2を見ると、全人口の2割弱がソウルに集中している。そのため大学数と人口を照らし合わせると同じくらいの割合ではあるが、皆がソウルの大学を目指すとなると、やはり大学入試競争となり大学就学能力試験が過熱化するのも自然なことかもしれない。

表1 韓国の大学数 (2019年)

	国立	公立	私立	合計
全国	34	1	156	191
ソウル	3	1	34	38

大学概況 (韓国統計庁, 2019) を基に筆者作成

表2 韓国の人口 (2019年)

	総人口	韓国人	在住外国人
全国	51,779,203	50,000,285	1,778,918
ソウル	9,639,541	9,249,364	390,177

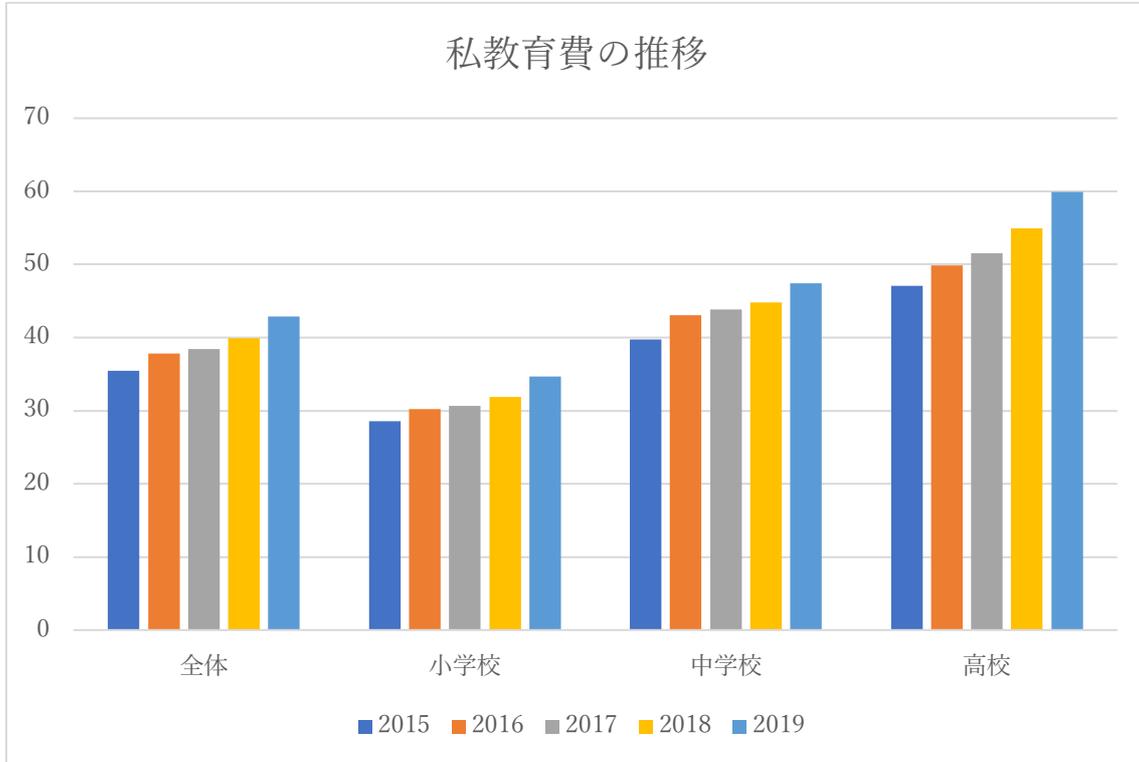
人口・世帯及び住宅 市郡区 (韓国統計庁, 2020) を基に筆者作成

2. 私教育の過熱化

ここまで述べてきたように、政府は初等教育から高等教育まで様々な政策を行い、教育の平等を目指してきたことによる成果が現れており、教育の機会においては平等がある程度実現されていると言えるだろう。しかし、このような教育機会の平等を追い求めてきたがゆえに、その教育機会の平等さえ覆しかねない問題が起こっており、それが「私教育の過熱化」である。高校平準化制度により教育の機会は確保できたものの、中学から高校で見られたように、大学入試競争が過熱化した。また、学力にばらつきのある生徒たちが共に学習することになったため、高校の学力低下が心配された。有田 (2016) によると、高校平準化措置の結果、学校教育に対する不信感が課外授業などの私教育需要を生むと同時に、多くの現役教師がアルバイトとして課外授業を行うようになったことから、教師、親、生徒が学校授業を疎かにするという悪循環が起きたという。対策として特殊目的高校が設立されたが、金 (2019) によると、この特殊目的高校こそが有名大学への進学に有利な学校だと認識され、私教育を加熱させているという。以上の理由から塾や家庭教師などの学校外教育である私教育の過熱化が問題となった。自治体国際化協会 (2004) によると、親の間で学校教育に期待せず、子どもを塾に通わせる動きが顕著になったという。また、私教育が過熱化したことにより、学校外の教育費による親への負担が増えた。この教育費の負担が、社会的格差や階級格差につながっていると言えるだろう。このような私教育の過熱化は近年も続いている。小学生までもが夜遅くまで塾に通い、韓国国内で問題となっており、塾の営業時間を法律で規制している。岩淵 (2013) によると、法律による規制はあるが、実際には規制を逃れて深夜まで営業している塾が多いという。しかし、規制をされるからこそさらに塾の費用が高くなる可能性もあると考えられる。図2を見ると、2015年から2019年の5年間だけでも私教育費は全体で7.4万ウォン上がっており、高校のみで見ると12.8万ウォンも上がっている。さらに年々高校の私教育費の上がり方が激しくなっている。ここから年々全体的に私教育費が上がっているが、特に高校の費用が上がっており、高校生の子の私教育の需要の高さや大学就学能力試験対策などに重要だということがわかる。また、政府などから新たな政策が出て

こない限り、私教育費は上がり続けるだろう。

図2 韓国の塾・家庭教師等の私教育費推移 (2015~2019年) (単位: 万ウォン)



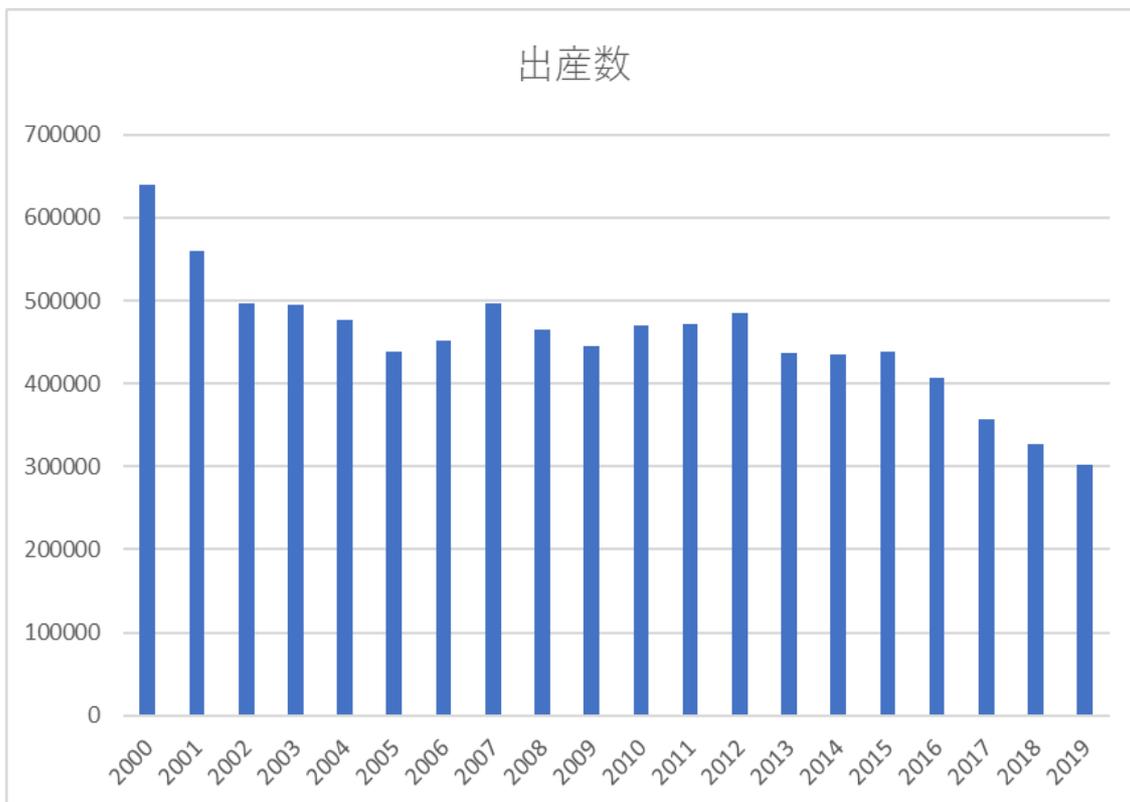
私教育費調査結果 (韓国統計庁, 2016~2020) を基に筆者作成

第三章 インタビュー調査

1. 調査の概要

第一章、二章から大学就学能力試験競争による塾などの私教育の過熱化やソウル近郊大学と地方大学の格差など高等教育に関する問題が出てきた。第二章で述べたソウル近郊大学への入学競争などは、教育の面だけではなく、韓国ではソウルにありとあらゆるものが集中していることが影響していると思われる。また、近年韓国の人口減少により地方大学の経営難など教育面の問題があるが、教育熱が高い韓国において私教育の過熱化による教育費の高さが人口減少、少子化に影響しているかもしれない。図3を見ると、2006年~2012年の出生数は増加または緩やかな減少だが、2000年~2019年全体で見ると急速に減少しており、2000年の出生数から比較すると、2019年は半分以下に減少していることがわかる。

図3 出産数の推移（2000～2019年）



出産順位別・出生（韓国統計庁，2020）を基に筆者作成

このように、韓国で教育熱がこれほどまでに高まる理由や、さらにこの問題から起こる問題について、韓国人へのインタビューを行いながら考察していきたい。

インタビュー協力者は韓国または日本に在住の韓国人23歳～50歳の男女4人である。調査期間は11月22日～12月17日であり、1人30分～1時間半程度のインタビューを行った。インタビュー時の音声録音、プライバシー保護の説明を行い、了承を得た。また、インタビューはほぼ韓国語で行ったため筆者が翻訳している。主な質問は以下のものである。

- ①高等教育は平等だと思うか。
- ②韓国人の教育熱が高いのはなぜか。
- ③私教育などの教育熱によるさらなる問題は何か。

2. 調査結果と考察

インタビュー結果全体を分析し、①～③の質問内容から重要だと考えられる6つのカテゴリーを以下に抽出した。

2.1 教育の機会の平等の支持

インタビューを行った 4 人全員が、教育の機会は平等でありその点においては支持をしていると答えた。D さんは、「大学入学の時は受験料もかかるし、お金がないと厳しい時もあるかもしれないけど、入学の機会だけで見れば経済格差もそんなにないし、平等だと思うかな。」と語った。C さんは、「私教育の問題とかもあるけど、高校はその高校独自の成績評価をしているから、実際レベルの高い学校とレベルの低い学校の成績上位者だと実際のレベルはかなり違うでしょ。でも大学修学能力試験は、どこの学校の誰が受けても同じように評価されるから平等だしいいと思う。」と語った。そして A さんは「誰にでも教育の機会があるということはとても重要な。」と語っており、韓国人が政府の政策通り、教育の機会の平等というものが非常に重要視しており、中等教育などと比べても、平等に評価される大学修学能力試験を受けたのちに学ぶこととなる高等教育において、教育の機会はある程度平等であると言えるだろう。しかし、インタビューを進めていく中で皆が肯定的に答えつつも否定的な声もあった。A さんは、「平等と言いながらも実際は表面的な平等だと思う。そして（表面的な平等だと言うことを）みんなわかっていると思う。」と語り、B さんも「新しい大統領を決めるとき、（立候補者は）みんな教育システムを変えると必ず言います。だから国民も毎回期待はするけれど、実際に実現されたことはほとんどないんですよ。」と語った。このように、平等だと言いつつも国民には否定的な気持ちがあり、それを黙認している状態なのかもしれない。

2.2 韓国人特有の価値観

韓国人の教育熱の要因は、韓国人特有の考え方が大きく影響していると考えられ、大きく分けると三つの考え方が見られた。一つは周りの目を過度に気にする声だった。A さんは、「韓国人は他人と比較したがるし、子供には自分よりいい仕事をして欲しいのはもちろんのこと、周りが羨むような仕事をしてほしいと思う人がかなり多い。そして、韓国人は自信がなくても自信があるように見せるし、そうしないと自分にチャンスが回ってこないんだよね。」と語った。また B さんは、「大学に行くことが人生の一番の目標になってる人が多いから、行けないと劣った人だと考える人が多い。」、そして C さんも、「いい大学に行けば他人が違う目で見られるようになるんだ。」などと語った。このように、韓国人は周りの目を気にすることが多く、周りによく見られたいという考えが強いように見える。そしてもう一つの意見は、競争心が非常に強いという声だった。B さんは、「誰かが落ちれば自分が上がるシステムがすごく嫌だし、みんなすごく周りと比べるし競争をしたがる。」と語った。そして A さんは、「高校の頃は成績が一位から最下位までいつも名前付きで廊下に貼りだされていてすごく嫌だった。これがみんなの競争心をすごくあおっていたと思う。最下位の人の多くはあきらめていたし、逆に勉強してないから仕方ないって感じで、ある意味変に見栄を張っていたとも思える。」また、「韓国は日本と中国に囲まれているし、（国自体が）生き残らなきゃと強く考えていると思うし、国民も（激しい競争をしてでも）チャンスをつかみたい

と考える人が多いんじゃないかな。」と語った。このように、国自体に競争心があり、国民は嫌でも競争せざる負えない環境下におり、常にいいチャンスをつかみたいという強い思いがあることが分かった。そして最後の意見が、親子の力関係に関する声だった。Aさんは、「いい家柄とかは全く関係なく、親、さらには祖父母の考えや意見は重要だし絶対なんです。だから韓国は親の権力が強すぎて、子供に決定権はほとんどないかな。」と語った。Bさんは、「韓国の親の教育熱は本当にちょっとおかしいです。でも子供が成功すると親はもちろん親戚みんなが喜ぶし親戚みんなの誇りになることですね。」と語った。そしてCさんも、「(私教育などによって)子供たちが辛いのが一番の問題だよ。本人は嫌でも親の言うことは絶対だから。」と語った。このように子供には決定権がなく親の権限が大きいことがわかる。親が子供のためを思い私教育を受けさせることもあるが、子供に受けさせられないと周りの親の目が怖いなど、親自身の問題も教育熱が上がる要因になっていると考えられる。

2.3 ソウルが中心の社会構造

インタビューの際に全員から「ソウル」という言葉が何度も語られていた。そしてソウルが一番であり、教育をはじめとする全てのものにおいてソウルが良いと考えていることがはっきりとわかった。教育面においてBさんは、「これは自分の経験ですけど、私はソウルに本校があるけれど地方にしかない学部に行きたくて地方大学に行きました。それなのに周りに言うと、『そっか地方大学に行ってるんだ。』など否定的に見られることがありました。自分では行きたいと思って行ったからすごく気分が悪かった。」と語った。またDさんは、「韓国には学縁という言葉があって、学校、主に高校での人との出会いのことを言うんだけど、ソウルのいい学校に行くと良い友達(優秀な人)に出会えて自分にとっていい環境が整うと考えるんだ。」と語ってくれた。そしてCさんは、「『in Seoul』という言葉があってソウルの大学とソウルの大手企業の連携が強いからソウルの大学に行こう、行かなきゃって言う意味で使う言葉なんだ。」と語った。このように韓国人の多くが教育を受けるにはソウルが1番だと考えており、ここでもやはり周りの目が気になり、不快に考えている場合もあることがわかった。そしてAさんは「韓国には日本のような地方番組がなくて、地方でもほとんどソウルの番組を放送しているから、無意識のうちにソウルが1番だと考えたり、ソウルと地方を比較しちゃうのかもしれない。」と語った。そしてBさんは、「ソウルがいいと考えてしまうけれど、実際に本当にそうだと思う。お店とかはもちろん病院とか交通機関とか結局ソウルには全部が揃っているし。」と語った。このように、韓国人に無意識のうちにソウルが一番だと言う考えが植え付けられており、そして実際にソウルにものが集まるといふ悪循環が起こっていると考えられる。安東(2013)も、ソウル周辺に人、モノ、カネが集中し、地域格差が大きいことが今日の韓国の特徴であり、格差縮小・解決が大きな課題だとしている。

2.4 人口減少と少子化問題

人口減少と少子化の問題も教育熱からなる私教育費の高さの影響も大きいと語っていた。Aさんは、「私教育費が高いのは少子化に影響していると思う。人によっては産まないんじゃないかって考えている人も多いと思う。」と語った。またBさんは、「生活費が高いから子供を産まないって言っている人が多いですけど、その生活費に私教育費が必ず入っていて、その比重は大きいと思います。」と語っていた。そしてDさんは、「最近、私教育は幼稚園からすでに始まっているから、さらに不安が大きいし、他の子供たちが幼稚園から私教育をしているのに自分の子供にできなかったらと考えるだけで怖いんだと思う。」と語った。このようなことから、私教育への不安による少子化は確実にあると言っても良いだろう。そして以前の私教育は小学校から高校までが一般的だったが、岩淵(2013)も韓国では幼稚園でも英語の授業があるのが一般的であり、特別な幼稚園ではなくても英語授業があると述べているように、幼稚園の頃から英語などの教育を行う韓国では、幼稚園からの私教育も重要かつ、当たり前になってきていると言える。この少子化問題は、子供に関心がない、産みたくないなどといった否定的な理由より、AさんやDさんが語っていたように、生みたくても産めない、不安が大きすぎるなどの子供を産むことへの不安が大きく影響しているのだろう。

2.5 移民の増加

この移民の増加については二つの意見が出た。一つは私教育等の教育や、韓国での教育への不満から海外に移民すると言う声だった。Bさんは「私は韓国政府への不満も多く、どうせ政府が行動を起こしてくれないとわかっている。そして子供たちには絶対に韓国で教育を受けさせたくないからここ(日本)に来ました。」と語っており、Aさんも「子供たちに韓国で教育を受けさせるのもいいかなって一瞬考えたりもしたけど、やっぱりそうしたくないかな。韓国の友達が私教育費の高さについてよく愚痴を言ってるし、日本の私教育費が安いのを本当に羨ましがっていた。」と語ってくれた。そしてもう一つの意見は、私教育の延長線上に移民という選択があると言う声だった。Dさんは、「もちろん政府への不満とかもあるけど、いい教育を子供に受けさせたいとか、後の就活に有利だと考えてする人も多いかな。その国の言語を確実に習得できるし、その経験(海外で生活すること)自体がすごい価値になるんだよね。」と語った。またCさんも「私教育費の問題や心配ってよりも移民も私教育の一つになってると思う。最近キログアッパが問題になってるし。」と語った。このキログアッパとは、海外に妻と子供を移住、移民させ、お父さんが韓国でひたすら働き、教育費、生活費を送ることである。金(2019)も、キログアッパという言葉は国語辞典にも掲載されるようになり、韓国の過度な教育熱が生み出した言葉であると述べている。このように、移民の増加は韓国の私教育の不安によるものもあるが、私教育の延長であり、より良い教育を受けさせたいという思いからする場合が多いと言えるだろう。しかしAさん、Bさんのように日本に移住した人からは、子育てをする身として、韓国での教育は難しく他の国

(日本) で受けさせたいと思うという切実な声も聞くことができた。

2.6 大学就学能力試験の影響を受けすぎている高校の教育制度

韓国の高校教育は大学修学能力試験の影響を大きく受けており、主に放課後の自律学習、高校の成績評価の問題点が見えてきた。一つ目の自律学習とは、学校が終わり放課後から夜 10 時頃までさらに勉強することであり、強制参加や自由参加など学校によって実施方法は様々なようだ。Bさんは、「自律学習は自立って言うおきながら全然自立ではなくて強制される。しかも(先生には)成績上位者にはいい教育をしようと言う考えがあったはず。有名大学に行く人が多いほど高校の名が知れるから。」と語っていた。しかし、一方でDさんは、「私の高校は新設校だったからか、自律学習は自由参加で受けた人が受けていたからすごくよかった。人によっては1人で勉強したい人も言うし、強制されるとすごく勉強がしづらい嫌だ。」と語っていた。このことから、自律学習によって教育の機会が制限されてしまう場合もあるが、近年は自律学習を自由参加にする事で、私教育を受けられない人へのサポートになるなど良い面も見られることがわかった。二つ目の韓国の成績評価については平等であり指示したいと言う声が多かった。Aさんは、「韓国の高校の成績は内申点がないし先生がひいきするようなこともないから平等でいいと思う。」と語り、他のインタビュー協力者も同じことを語った。しかし、この成績評価から問題点が見えてきた。Dさんは「高校三年は特に授業自体が大学修学能力試験の対策だから、私教育を受ければ学校の成績も自然と上がるし、大学修学能力試験の対策までできるしよかった。」と語った。Cさんは、「課外授業(塾など)が重要だし、大変でもどうせ学校で寝ればいいし。先生も成績さえ取っていれば、授業中に寝てても疲れているのかな、寝かせてあげようってなるのが普通だよ。」と語った。このような声から、韓国の成績評価の仕方は韓国人には支持されているものの、その評価により高校の授業を疎かにする生徒も多く、さらに私教育に力を入れるという悪循環が起こっていると考えられる。

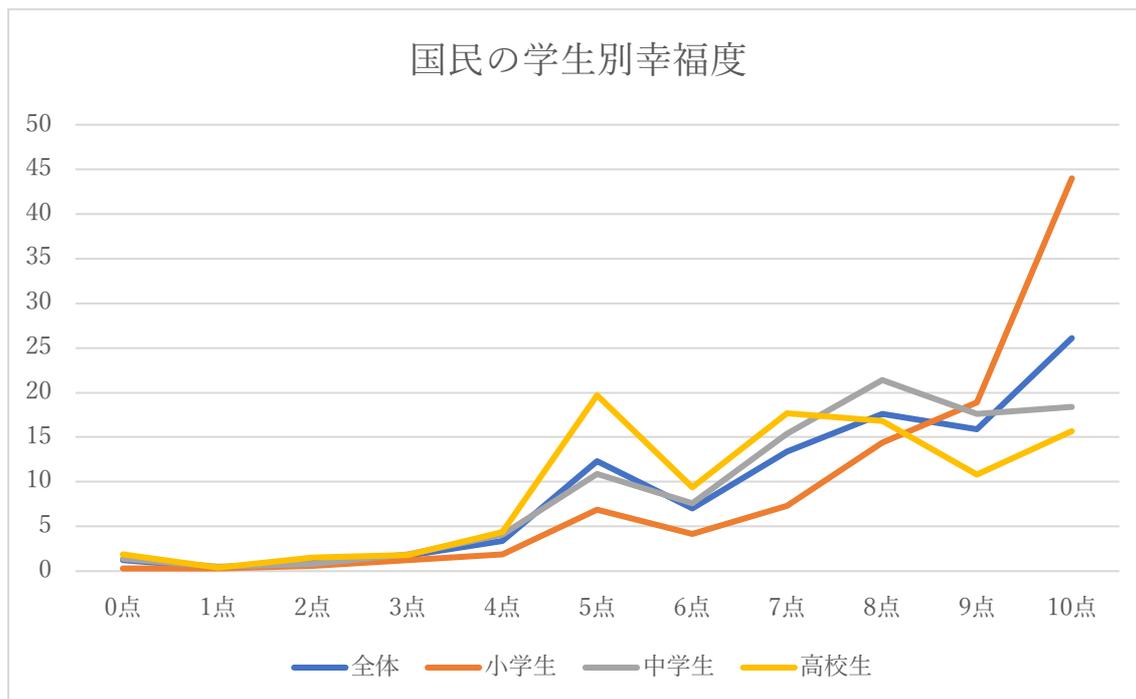
2.7 国民の幸福度の低さ

韓国は先進国の中で、国民の幸福度が低いと言われているが、インタビュー対象者皆が教育熱による学生のつらさを語っており、実際に学生の幸福度が低いと考えられる。Aさんは、「ポジティブで自信がある人が多いから成功する人ももちろん多いんだけど、現実はずっと成功できるわけでもないし、(成功できなかった時の)ショックがすごく大きいと思う。就職とか結婚も親の意見が絶対だし、(親の期待に応えようとする)最近の若者には深刻な問題だと思う。」と語った。そしてCさんは、「塾は自分が行きたいわけではなくて親が行かせたいから、子供たちは仕方なく行ってることが多い。」さらに、先ほど韓国人特有の価値観でも述べたが、Cさんは、「(私教育などによって)子供たちが辛いのが一番の問題だよ。本人は嫌でも親の言うことは絶対だから。」と語っており、親子関係において子供に決定権がないことも幸福度の低さに影響していると考えられる。このようなことから、親からの期待

や私教育の強制等の影響もあり、子供たちの負担が非常に多いことがわかった。図4は、国民の幸福度を全体、学生別で0～10点満点で調査したものである。これを見ると、全体は26.1%の人が10点を付けているが、高校生は15.7%とかなり低いことがわかる。また、全体及び小学生は10点を付けた人が最も多いが、中学生は8点、高校生は5点を付けた人が最も多く、徐々に幸福度が落ち高校生が最も幸福度が低いことがわかる。

図4 韓国国民の幸福度調査

(%表記)



暮らしの満足度 (韓国統計庁, 2020) を基に筆者作成

Cさんは、「勉強したくないのにしなきゃいけないし、高校のテスト期間付近は毎日4時間睡眠が当たり前だったしつらかった。でもみんなそれが当たり前だったから仕方なかった。」と語った。このように、周りがやるから自分もやらなければならない、学生、主に高校生の大変さがよくわかり、幸福度が低いのも当然の結果かもしれない。

終わりに

以上のことから、韓国の高等教育の平等は教育を受ける機会の平等に重点が置かれていることがわかった。そして韓国人特有の考え方によりソウルにあらゆるものが集まっていることが、教育へも影響を与えていることがわかった。また政府が私教育等の対策を行おうとしたが裏目に出るなど、未だ良い解決策が見つからないように見える。そしてインタビュー調査から、韓国人が支持している高校の成績評価が私教育の過熱化に大きく影響し

ていると推測できる。また、経済格差がある以上、私教育等の不平等を完全に解消することは困難であるが、私教育熱を抑える政策を行うより、経済的問題で私教育を十分に受けられない学生へのサポートを手厚くすることが重要だと考えられる。私教育費を下げ、より多くの学生が私教育を気軽に受けられる環境づくりや、自律学習を自由参加とし、大学就学能力試験対策を手厚く行うなどといった対策をすべきだと考える。このような対策をできる限り行うことで、高等教育を受ける機会の平等として行われている大学就学能力試験を受ける人への配慮ができ、より平等が保たれるのではないだろうか。

本論文では、主に平等を教育機会について、限定的な視点で考察を行なったため、就職等、まだ高等教育に関する平等について十分に確認できていない。そしてインタビュー対象者の年齢が幅広く、4人中2人は現在日本在住のため、近年の韓国の教育制度についての知識は少ないかもしれない。この点は今後の課題としたい。

参考文献・参考 URL

- ・有田 伸 (2006) 『韓国の教育と社会階層：「学歴社会」への実証的アプローチ』 東京大学出版会
- ・安東 由則 (2013) 「韓国における高等教育政策の動向と大学の現況」 『武庫川女子大学教育研究所研究レポート』 武庫川女子大学教育研究所 43 pp. 53-88
- ・石川 裕之 (2016) 「韓国の高等教育における職業教育と学位」 『学士と大学』 独立行政法人 大学改革支援・学位授与機構 2 pp. 133-154
- ・岩渕 秀樹 (2013) 『韓国のグローバル人材育成力：超競争社会の真実』 株式会社講談社
- ・小川 佳万・姜 姫銀 (2018) 「韓国の高等教育ーグローバル化対応と地方大学ー」 『高等教育研究叢書』 比較教育学研究 139 pp. 1-14, pp. 45-56
- ・金 敬哲 (2019) 『韓国 行き過ぎた資本主義：「無限競争社会」の苦悩』 株式会社講談社
- ・金 東光 (2016) 「韓国高等教育における公正性の問題についてー「三不」政策を手掛りにー」 『社会環境研究』 8 pp. 21-33
- ・自治体国際化協会 (2004) 「韓国の教育自治」 財団法人自治体国際化協会 pp. 12
- ・鈴木 拓也 「韓国で大学入試、感染で隔離中の学生も受験 応援は自粛」 朝日新聞デジタル, 2020. 12. 3 (最終閲覧日 2020. 12. 22)
- ・趙, 卿我 (2013) 「4 韓国における教育評価改革の変遷」 『円環する教育のコラボレーション』 京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター pp. 59-72
- ・松本 麻人 (2016) 「韓国における中等教育「平準化」政策の動揺」 『国立教育政策研究所紀要』 国立教育政策研究所 145 pp. 1-11

- 국가지표체계 (2020) 「1 인당 국민총소득」
 (国家指標システム (2020) 「一人当たりの国民総所得」)
<https://www.index.go.kr/unify/idx-info.do?idxCd=4221>
- 국가통계포털 (2020) 「삶의 만족도」
 (国家統計ポータル (2019) 「暮らしの満足度」)
https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01#SelectStatsBoxDiv
- 국가통계포털 (2020) 「 시도, 성, 모의연령, 출산순위별 출산」
 (国家統計ポータル (2020) 「市道, 性, 模擬年齢, 出産推移別 出産」)
https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01#SelectStatsBoxDiv
- 국가통계포털 (2020) 「인구, 가구 및 주택 시군구」
 (国家統計ポータル (2020) 「人口, 世帯及び住宅 市群区」)
https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01#SelectStatsBoxDiv
- 국가통계포털 (2019) 「대학 개황」
 (国家統計ポータル (2019) 「一人当たりの国民総所得」)
https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01#SelectStatsBoxDiv
- 통계청 (2016) 「2015 초중고 사교육비조사 결과」
 (統計庁 (2016) 「2015 小中高 私教育費調査 結果」)
http://kostat.go.kr/assist/synap/preview/skin/doc_mobile.xhtml?fn=synapview351611_9&rs=/assist/synap/preview
- 통계청 (2017) 「2016 초중고 사교육비조사 결과」
 (統計庁 (2017) 「2016 小中高 私教育費調査 結果」)
http://kostat.go.kr/assist/synap/preview/skin/doc_mobile.xhtml?fn=synapview359420_2&rs=/assist/synap/preview
- 통계청 (2018) 「2017 초중고 사교육비조사 결과」
 (統計庁 (2018) 「2017 小中高 私教育費調査 結果」)
http://kostat.go.kr/assist/synap/preview/skin/doc_mobile.xhtml?fn=synapview366658_7&rs=/assist/synap/preview
- 통계청 (2019) 「2018 초중고 사교육비조사 결과」
 (統計庁 (2019) 「2018 小中高 私教育費調査 結果」)
http://kostat.go.kr/assist/synap/preview/skin/doc_mobile.xhtml?fn=synapview373552_1&rs=/assist/synap/preview

- 통계청 (2020) 「2019 초중고 사교육비조사 결과」
(統計庁 (2020) 「2019 小中高 私教育費調査 結果」)

http://kostat.go.kr/assist/synap/preview/skin/doc_mobile.xhtml?fn=synapview381064_1&rs=/assist/synap/preview

ファイル名 : 卒論修正版.docx
フォルダー :
/Users/osamunote/Library/Containers/com.microsoft.Word
/Data/Documents
テンプレート : Normal.dotm
表題 :
副題 :
作成者 : ODA ITARU
キーワード :
説明 :
作成日時 : 2021/04/29 8:59:00
変更回数 : 2
最終保存日時 : 2021/04/29 8:59:00
最終保存者 : Microsoft Office User
編集時間 : 0 分
最終印刷日時 : 2021/04/29 8:59:00
最終印刷時のカウント
ページ数 : 16
単語数 : 14,802
文字数 : 3,144 (約)